

## 参考資料（２）綾瀬市の取り組み

### 平成 22 年度 第 1 回綾瀬市地域リハビリテーション推進連絡会研修会「事例検討会」報告

#### 1 概要

本研修は、平成 21 年度から行っている地域リハビリテーション推進モデル事業の位置づけで、平成 22 年度の第 1 回研修会として、平成 22 年 6 月 9 日午後 6 時 30 分から 8 時 30 分の予定で綾瀬市役所 3 階会議室において開催した。

受講対象者は、高齢者や障害者の保健・福祉に従事するケアマネジャー・障害者施設職員等であった。研修はグループワークによる事例検討を通じて行われた。検討課題として提示された「高齢者と障害者の同居する家族への支援方法」というテーマに対して、活発な討議と発表が行われた。

#### 2 応募者及び受講者の状況

参加申し込み者数は 47 名で受講者数は 45 名であった。職種別の応募状況を以下に示す。

職 種・所 属	申込み数	参加者数
ケアマネジャー	20	20
障害者施設職員・相談員	9	9
高齢者施設職員	6	6
地域包括支援センター	5	3
高齢者デイサービス職員	2	2
神奈川リハビリテーション病院	2	2
ヘルパー	1	1
神奈川県	1	1
社会福祉協議会	1	1
合 計	47	45

#### 3 研修内容

提示された事例の概要とタイムスケジュールを以下に示す。

事例は高齢者の母親と、身体障害者手帳を有する娘の事例である。母親への支援と娘への支援を考えると、どこから、どのような情報を収集するか、また利用すべき制度やサービス内容は何か、支援者側のスタッフはどのような職種や機関と連携を組んだらよいかなどを検討しあうグループワークを設定した。グループは高齢者支援関係、障害者支援関係など、専門分野を混在した構成とした。限られた情報から、課題を浮かび上がらせ、問題の根源や今後の生活の組み立てや家族のエンパワメントを引き出していく方策などを話し合い、それぞれ相互の専門領域の知識や手法を学びあうことを目的とした。

## 事例の概要

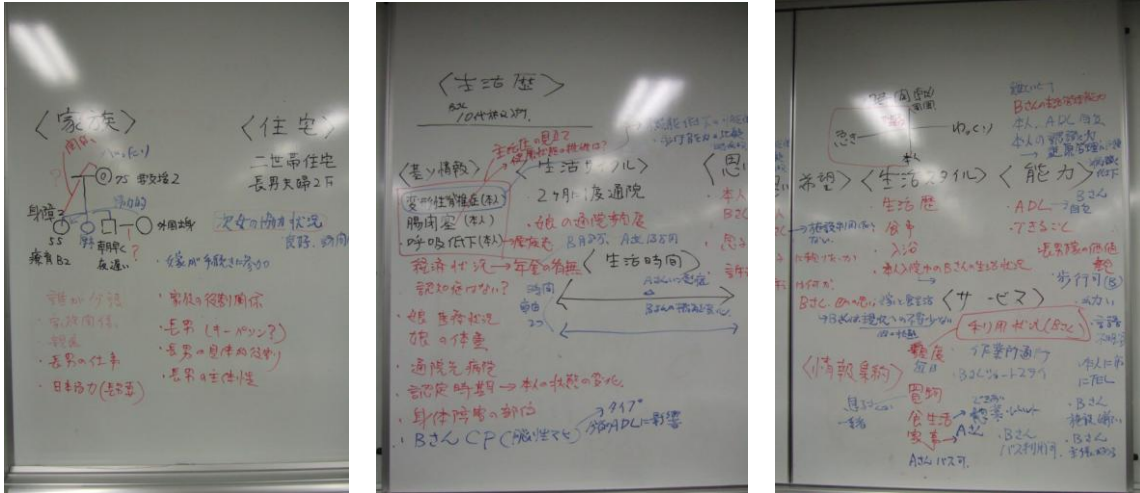
- 本人  
Aさん（75歳 女性）要支援2
- 家族状況  
娘Bさん（55歳） 身体障害者手帳2級、療育手帳B2  
2世帯住宅の2階に息子夫婦  
息子は朝早く出勤、帰宅は遅い  
息子の妻は外国人  
生活習慣の違いから生活は別
- 受診状況  
X病院に定期受診（変形性脊椎症）
- 相談内容  
腸閉塞、呼吸低下などの体調不良で2か月に1度の割合で入院  
介護認定を受けている自分と障害者の娘の支援してもらいたい

## スケジュール

- 18:30 開会  
事例検討の方法の説明
- 18:45 グループ内で検討  
検討内容  
“支援をするにあたり、誰からどのようなことを確認しますか”
- 19:15 グループからの報告（1グループ 5分以内）
- 19:45 現在の支援者から報告
- 19:50 神奈川リハ支援センターからのコメント
- 20:00 グループ内で検討（15分程度）  
検討内容  
“支援をするにあたり、どのような機関との連携が必要だと思いますか”
- 20:15 現在の支援者から連携状況の報告
- 20:20 神奈川リハ支援センターからのコメント

#### 4 グループ発表の内容

各グループから出された意見を、ファシリテーター役の神奈川県リハビリ支援センタースタッフが項目ごとにホワイトボードに板書することにより、参加者の意見が整理されることをねらった。



少ない情報量を補うために、何をどこから確認するかによって、想定される本人像、家族像、状態像を浮かび上がらせ、支援のプランを構成していく。このとき、現状の障害や症状だけではなく、今後予想されることも支援プランに反映させていくことが大事である。

たとえば、この事例の場合、「娘は脳性麻痺、ADLは何とか自立域だが、歩行がやや困難、手の不自由さが顕著」と聞いたとき、脳性麻痺のアテトーゼ型であれば、実年齢より身体に加齢は早く、特に頸椎症の懸念があり、首の痛みや歩行の不自由さが症状として出現していれば、今後早い時期に歩行困難やADLの急激な低下などの変化も予想されることを、スタッフ側は念頭に置く必要がある。したがって支援プランに短期、長期の時間軸も入れ込んでおくことが大事である。また先天性の障害の子供と母親の関係は相互に依存しあっていることも多く、事態が深刻な割には当事者が気づいていないか、他者の関わり（サービスの導入）を遅らせたい意識も働く。母親が高齢で認知症の傾向がある本事例では、なおさら当事者の言動の周辺に気を配る必要があるであろう。

#### 5 まとめ

高齢者支援の専門職と障害者支援の専門職との合同の研修会というのは、他市でも例は少ないであろう。今回の事例のように高齢者の母親は介護保険、障害の娘は自立支援と、制度の違いが支援者の職種も異ならせてしまう場合、目にみえない狭間の課題を見落としがちである。この研修において参加者が、お互いの職種と職場を知り合い、支援の手法の違いを学び合い、今後、地域の中で連携できる強力なスタッフとして、この場を共有できたことは大きな意義のあることと思う。この研修に医療やリハビリテーションの分野で神奈川県リハビリテーション支援センターが協働できたことも深く感謝したい。